

# キリシタンの墓

小山牧子

え・石阪春生

## 村重船長

あらずじ 二年前短期大学を卒業した佳は、母親蘭子との生活に息づまりを感じ、米園系海運会社のエージェントに勤めに出ることにした。ある夜ボスのヒギンズ氏とともに訪れた願成寺の墓地のくらがり一人の老人がひっそりとうずくまっており、その老人はなぜか荒木村重という不運な武將と、彼にゆかりをもつキリシタンの遺跡にひどく執着していた。ある日佳は遠く離れている父からの便りを読んだあと、その孤獨な老人の顔が佳の胸を去らず、再び願成寺の参人を訪ねる。村重船長とよばれるこの老人の部屋を何気なく見わたしているとき、佳は飾り台の上のすでに褐色に色をかえた写真に目をとめた。その写真の男は思ひがえようもなく、若い頃の佳の父、村林裕作であつた。

古い一葉の写真を、彫像のように動かぬ姿勢で凝視する佳に、老人は柔和なまなざしを注ぎながらいった。

「私の娘と息子ですのじゃ」

「あなたの息子……？」

が、娘と並ぶ若い男は、まさしく佳の父、若い日の村林裕作ではないか。

「そう……いぶかしいかな？ 娘は血をわけた私の娘でな。その隣りは、私の娘がこの世にある間、まことに清らかな愛をかわしあっていた、つまり娘の許嫁じゃった。いまからおもうと、私は、実の娘以上にその娘の婚約者

と魂の深奥でつながっていたようにおもふのだが……」  
老人の唇のまわりに、ほろ苦い自嘲的な皺が刻まれた。

「お嬢さん、なんてお名前だったの？」

たずねながら老人の前に立ちもどり、再び膝をそろえて坐ったとき、佳は、自分の唇が血の氣を失い、かすかに震えているのを意識した。

「ユカ子……」

やがて、娘についての追憶にひたるのがこの上なく楽しいといったふうに、

「由緒あるというときの由に、人べんに土がふたつ、佳き人の佳を書いて、由佳子と読みましたのじゃ」

由佳子！ 名前の真中に佳き人の佳、佳、佳！

同じ一字を名前にもつ佳の心は、更に波立った。

波立つ胸の奥で、かつてこの寺をおとすれた夜、露路うらにうずくまっていた易の老婆の黒ずんだ顔が鮮烈に浮きあがる。そして、その露路の上にはりついていた漆黒の空と不吉な赤い星……。

おもえば、古い婆アの「西へ行くな」のひとつに追いたてられ、佳はこの老人と出合い、父裕作の秘密に直面してしまったのである。しかし、悪の世界から繰りだされたかとおもえる宿命の糸にあやつられ、恐ろしい奈落の世界に堕ちてゆく自分の姿を想像し、こわばった表



情をくずすことができぬ佳ではあったが、もちまへの強い好奇心だけは押さえこむことができない。

「娘さん、いつ頃になくなられたの？」

「そう……もう二十五年になりますかの？」

二十五年……。そう聞いて、佳は安堵する。

若くして逝った老人の娘にゆかり深い名をもっているが、昨年の十一月に二十三歳の誕生日をむかえた佳の出生と、その娘とのかかわりはない。

「心が澄み過ぎておりましたのじゃろう。由佳子は、この汚れた世に生き抜くためには、あまりにも繊細でありすぎたようにおもわれてなりませんのじゃ」

老人は、なおも楽し気に語り続ける。

「最初に発病したのは、十六歳のときじゃった。そのときは丁度、私が岡にあがって暮らせる時期で、私は娘を連れて、信州の高原にゆきましたのじゃ。小さな山荘に起き伏して、娘は療養につとめ、私は半年の間、次第に生気をととりもどしてゆく娘を見守って暮らしたものです」

老人の目は、いつか熱っぽく、快楽にふける男のような輝きをおびはじめた。

「村林君が、はじめて私たち父娘をたずねてきたのは、その高原にいたときだったと記憶しているのじゃが。結

核という病気は、どこか開病する人間の情念の世界を深めるところがあるのかも知れませんのう。あるいは、単に療養生活につきまとう孤独感をたえがたくもったからか、由佳子は、そのとき以前には数ある私の若い部下には示したことの無い親しげな態度を、村林君に見せましたのじゃ。由佳子は、村林君の向上心に燃える青年将校の風貌に、父親である私と共通したものを見たのかも知れぬ。そして、村林君は、由佳子の傷つきやすい純白の花のような清らかさに魅かれたものと、私はおもいますのじゃ」

話に引き入れられながらも、佳の心は、なおもおだやかでない。佳の愛する父が、こんな大切な秘密をかくしもっていたとは……。佳は、父の世界から完全にはじきだされ、のけ者にされていたのだ。まるで、馬鹿かお人好し、それでなければ、子供あつかいではないか。

「二人は、よく話しながら高原を散策し、時々若い二人が唄うデュエットが、風につけて私が待つ山荘にまで響いてきたものだった。そのときから、村林君は由佳子の希望になり、村林君もまた、由佳子を将来の伴侶と決めたらしかった。海上での忙がしい勤務の明け暮れ、よくこれほどマメにおもいうほど、村林君の便りは由佳子に届いたし、一方、由佳子の方は病人だ。手紙を書いたり受取ったりするのだけが楽しみといったふうな暮らしぶりでしたのじゃ」

「で、その恋はみのらず、娘さんは亡くなられたというわけなの？」

佳の語調には、追憶にひたる老人の情を断つような鋭い棘がひそんでいた。

「そうですのじゃ。再発してからの由佳子の病状は悪くなる一方で、海上生活者である私には駆けつけるといってもなく、医者と看護婦に看とられただけの淋しい臨終でしたのじゃ。最後まで、私と村林君の名を呼び続けられましたそうで……」

老人の目から、一瞬、快楽の色をおもわせる輝きが消



え、その表情が陰鬱にかけた。と、二人が対座する部屋もまた、老人の表情にふさわしい濃いグレイの日陰の色に染められているのに、佳は気づいた。たぶん、春の陽が、早ばやと天を駆け過ぎ、かげろうが立っていた境内も、西側の民家や門のかげにすっぽりと包まれてしまっているのだらう。

日脚の早さを感じながらも、不機嫌そうに唇を閉じた老人のもとを辞するには、なお問いたださねばならぬことが無数にあるような気がして、佳はその暗鬱な部屋にじっと坐っていた。いま、むつつりと黙りこんだ老人に何かと問うことは、厚い鉄の扉を、ハンマーで乱打するときにそうであらうと想像できるほど、たいそうな勇氣がいる。ハンマーで打たれた鉄の扉は、天にとどくほどの大音響でがなりたてるに違いない。老人もまた、佳の不用意な質問に、激しい怒声で応じそうな気配がするのだ。が、やはり、佳は問わねばならない。たくさんの問いが拒まれるならば、ただ一つ。あと一つだけ……。

「あの……あの、たち入ったことをおたずねするようで失礼とはおもうのですが、お嬢さんの婚約者のかた、いえ、あの……」

しどろもどろに問う佳の前で、老人の沈んだ表情は、かたくなに動かない。

「ごめんなさい。息子さんとおもっておられる方は、いまだどうしていられるのですか？」

「え？ 村林君のことですかね」

我にかえった老人の声は、佳の予想に反して、意外と静かであった。

「この神戸に住んでいますよ。私と彼との魂のうちでの骨肉の関係は、いまでも続いておりますのじゃ。感心な息子でな。いつもひと航海を終えて岡にあがってくると、一番先にこの老人をたずねてくれますのじゃ。今度は五月に神戸にもどると、ついこの間、連絡をくれましたがの……」

「まあ……」

低く驚きの声をあげる佳の心の深みから、細い一本の血の筋が流れはじめる。許せない。絶対に許せない。佳は、そのことを自分だけのものと堅く信じ愛していた父裕作の背信とおもい、心のうちでなじった。五月帰港を知らせる父の手紙は、母にさえも見せず、そっと大切にかくしもっている佳だ。その父が、佳のあずかり知らぬところでこの老人と親子の情を交わしあい、佳によこしたのと同じような手紙を送っていたとは！

この老人もまた、父裕作を所有していたということでは、この初対面に近い老人を憎むかも知れない。そのためか、佳の語調は、シニカルにとがれていった。

「その方、結婚なさって、しあわせな家庭を作っておられるのでしょうかねえ」

「さあねえ、しあわせであるかどうか私は知らん……」

と、そこで、老人の暗鬱な表情に一時、鋭利な刃がきらめくようなゆがみが走った。やがて、ゆがんだ表情にふさわしい皮肉な口調で、

「彼の家庭のことにまで立入ったことはありませぬが、私の娘は、いま世にありましたら、女流歌人として、日本で右に並ぶ者がいないほどの評価を受けておりましたじやろう。地道な娘でしたが、感受性の強い豊かな情感をもっておりましての……、亡くなったときは、交友のあった歌の仲間から、日本の歌壇全体の損失といって惜しまれたものでしたよ」

いつまでも消えない老人の表情の皮肉なゆがみから、佳は老人が、父裕作の妻である女流歌人蘭子の生活をおぼろげに知り、関心をもっているらしいことを感じとったのであるが……。

佳は、理不尽な宿命を拒もうとするかのように、老人の言葉に必死にあらう。

——嘘だ。この老いぼれ、なにかで、なにかで私たちの一家のことを知っていて、話をでっちあげたに過ぎないのだ。パパのことは、もし事実だったにしても、青春にありがちの小さなエピソードに過ぎないのだ。パパに限



44. 15 44. 5 44. 44

って、私に秘密にしたロマンスの思い出を終生胸に抱いているなんてことありえないもの。嘘だ。この老人の話は、一部をのぞいてほとんど全部、孤独な自分を慰めるための作り話に過ぎないのだわ――

佳は、必死にあがらい続ける。が、あがらなくても、あがらなくても、老人の言葉の確固とした響きのすべてをはね返すことはできない。佳は、わがままに育てられた娘特有の、内部におきた葛藤を不機嫌な猛々しい相であらわにした。と、老人は、そんな佳の表情に気づき、  
「古いなじみでもない若い娘さんにこんな話、面白くもなかったでしょう」

「ええ、ちっとも面白くありませんわ」

老人の表情からは、例の皮肉なゆがみは消え、唇のまわりに、年齢よりも老けて見えるしよぼしよぼとしたはにかみの小皺が浮きだした。やがて、老人の佳に注がれるまなざしが暖かくなごみ、

「あんた、お父さんがおりなさらんのでは？」

老人は問うたが、佳はたかぶった気持のまま、

「なぜ？なぜそんな変なことお聞きになるの？」

「変なこと？変かな……あんたがヒモジそうな顔をしておるので聞いてみたんじゃないか」

「ヒモジそうな顔をしておりますの？わたしノ」

頭をめぐって、熱い血がいつせいに駆けのぼる。

「怒りなさるな。私の娘も、私が留守がちだったからか、あんたと同じような顔つきをしておるときがありました。それをおもうと、あわれがよけいかりましての……。この間の真夜中に異人さんと墓道を歩いておるあんたと話そうとしたのも、そのあんたの顔のかげりのせいでしたのじゃ」  
「おせっかいなのね。残念ながら、わたし立派な父がおりますの。失礼しますノ」  
立ちあがりながら、端ない言葉の奥に、憎しみと入れまじった老人への甘えがひそんでいることを、佳は意識した。そのせいかどうか、目の玉があつい。もうしばらくこの部屋にとどまるなら、すべての不機嫌な感情をサヤにおさめ、老人の前でオンオンと泣きはじめるだろう。恥ずかしい。だれがこんな大嘘つきのふうてん老人の前で泣いてやるものか。だれが泣いてやるものか。

「ヒモジそうだなんて変なことという人に、このお花さしあげません」  
いうなり、手みやげのバラの花をとりあげ、窓ごしに日ざしがかかる境内の空地に投げすてる。次の瞬間、ひらめくように敏捷な動作で老人の部屋を去り、佳は戸外へ飛びだしていた。

体の中で幾匹もの獣が乱舞している。あの灰色の部屋と老人を白昼夢として、記憶の片すみに閉じこめておきたい。いや、おかねばならぬ。が、佳は、自分が好奇心と探求心の強い娘であることを知っている。この体の中で乱舞する獣を眠らせることは可能か。否である。

「タクシーノ」

佳は、車道に身をのりだすほどに荒っぽい拳手のしかたで車を止め、

「一の谷」とゆき先を告げた。

佳が去った寺の境内で、投げすてられたバラの花束がじんと冷えていた。（つづく）





Mr. Kent  
came to Kobe  
流行に左右されない  
本来のオシャレ  
それがKentです  
シックな  
スコッチ風の店舗  
それがFunakiyaです

Kent shop

**フナキヤ**

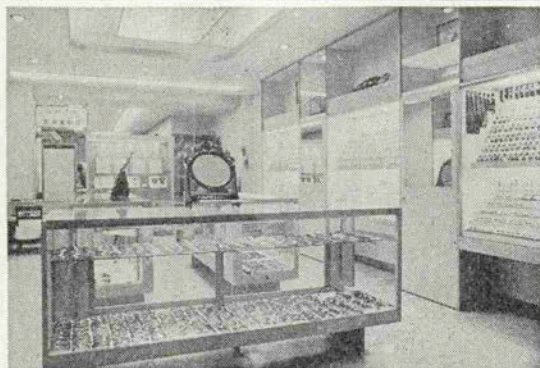
元町3 TEL <32> 0356



ハイセンスの紳士服で最高のおしゃれを!

**三恵洋服店**

元町4丁目 TEL (34) 7290



べっ甲美術品とアクセサリーの専門店

**太田 鼈甲店**

元町1丁目 TEL (33) 6195

オリジナル **L** サイズ

草履新発売

創業明治二十八年

**履物の山下**

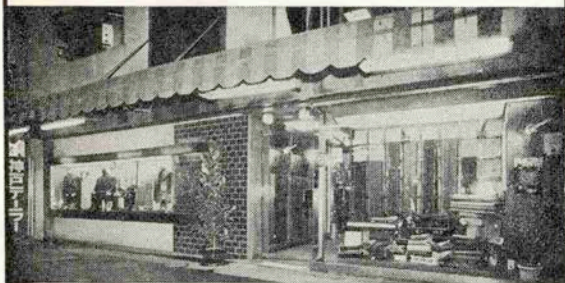
古い老舗に新しいセンス

確実正札 完全冷暖房

静かに品選びの出来る店

神戸三宮センター街 TEL (39) 0256

高級紳士服専門店  
**神戸テーラー**



さんちかメンズタウン TEL 03 03 88  
生田区北長狭通2(阪急西口) TEL 03 2817・3173

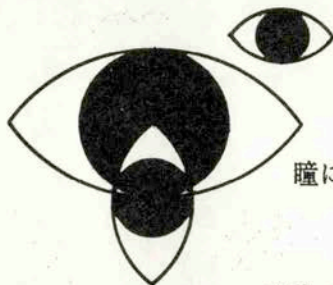


おもちゃの  
**カメヤ**

三宮方面でのお買物は……  
さんちか店 フツミリータウン  
三宮店 センター街大洋劇場東隣  
元町方面のお買物は……  
元町通3丁目山側  
パンフウ店 元町通1丁目不二家前  
03 03 40 45  
03 03 49 69  
03 03 60 80



桃の節句には  
カメヤのお雛さまを

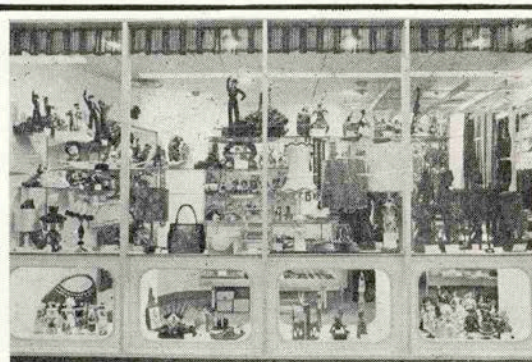


瞳に美しさを保つ  
スポーツに  
美容に  
現代の科学が生んだ  
コンタクトレンズ

日本コンタクトレンズ協会会員

**国際コンタクトレンズ研究所**

神戸市葺合区御幸通八丁目九ノ一 (三宮駅前)  
神戸国際会館内 TEL (22) 8161・(23) 2570



直輸入インテリア・ギフト

**サンレイ**

神戸国際会館 1 階  
TEL (078) 22-9713



おすし  
てんぷら



栄  
彌



営業時間  
A.M.11.30~P.M.9.00

本店 大丸前・三宮神社東

TEL 33 56772

(毎週水曜日休み)

支店

さんちか味ののれん街  
TEL 39 52333

(第3水曜日休み)

やっぱりうまい  
むさしのとんかつ



ムサシ  
ムサシ

でんわ・33-33771

32 32 33 33 33 33  
10 635 10 635 10 635



スタンド

香  
桑

桑 烟 房 子

リラックスした  
ひとときを……

コウベビル地下  
TEL 33-6763



北海道の味を直輸入の店

スナック ドナドナ

下山手通1丁目5 ゼウスタウンビル地下

TEL 39-1200

カクテルラウンジ

# サヴォイ

生田区北長狭通 2 丁目  
TEL33-2615

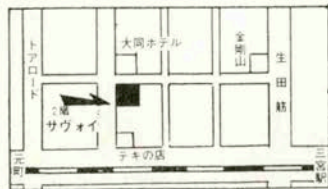
## DRINKING



★寒い冬も去り、暖かい春がもうすぐそこまでやってきている。国電沿いの、サンセット通りにあるテキの店を少し北に入った所、ビノキオの北隣り、ケラーの 2 階に昨秋引越しオープンしたサヴォイはダーク調のシックなインテリアとゆったりとした空間とで飲む人の心を柔らかくつつんでしまう。マスターの小林省三さんは昨年、万博の世界カクテルコンクールで金賞を射とめ、その腕のたし加が楽しめるので洋酒ファンにとっては大変嬉しい。小林さん夫妻やバーテンさんたちの細かい心づかいが店のすみずみまで行き届いており、落ち着いた気持ちよく飲める、とファンも多い。スペースの広いボックス席もあるのでグループでも楽しめる。

サヴォイ特製サンド クロックムッシュ ¥300 ビール ¥200

営業時間 P.M.5:00~A.M.12:30 日曜は休みです。



SNACK & DRINK

# フルール

生田区中山手通 1 丁目13  
天成ビルB1  
TEL39-1366

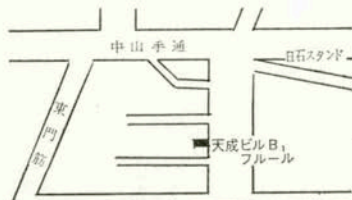


★三月ともなると妙に心がうきうきするものだ。花の香りをいっぱいさせて、春がもうすぐそこまできているせいかもしれない。昨秋オープンしたばかりのこの“フルール”は今年はずいぶん春を迎える。花がとっても好きだというママの赤沢れい子さんは、そのやさしい人柄で飲む人の心をしらすらうちに暖かくつつんでしまう。店内にはゆったりとした広いカウンターの上に、ゴージャスなインテリアのボックス席もあり、クラブのように落ち着いたムードで飲めると好評だ。また気軽に食事のできるので大変重宝がられている。

ビール ¥250円 カクテル ¥400円 フィーズ ¥400円

ステーキ ¥1,800円と1,000円 パター焼 ¥700円 お茶漬 ¥350円

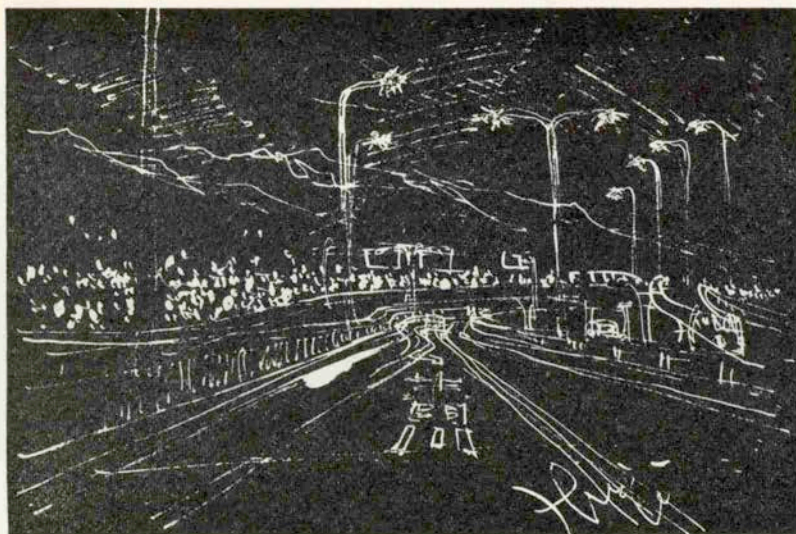
P.M.6:00~A.M.3:00 第1、第3日曜は休みです。





# 曲線ハイウェイ

武田 繁太郎  
え・横 塚 繁



★あらすじ 浜名湖北岸の小さな岬のうえに建てられた浜名湖サーピス・エリアで、多木洋介は艶のある薄い小麦色の肌をした若い神戸の女性、宇津康子を知る。MVハードトラップを駆って、ドライヴに景色が深いはじめた頃、多木は康子とともに館山寺湖畔のホテルに入る。それから十日後、二人は久しぶりに浜名湖SAで逢瀬を持ち、朝霧高原で愛を確かめあった。身許をあかそうとはしない康子は、その後も十日か半月おきぐらいに、多木にデイトの電話をかけてきた。康子の正体を知るために、多木は神戸出身の友だち岡本和彦を訪ねた。岡本はちよつとそこまで行くかのように女友達ルミと多木を誘って、東名神を神戸に向かった。岡本は浜名湖SAまでノンストップで運転してやっとレストランで一服した。

浜名湖SAでひと休みしてから、終点の西宮ICまで、途中、大津SAでトイレを使ったほかは、岡本は、とうとうノンストップで走りつづけた。

「おれ、交代しなくてもいいな？」

浜名湖SAをでるとき、多木は、いちおう念をおしてみたが、

「いいさ」

岡本は、当然のことのようにうなづいた。

多木は、フオード、 Mustang などというカッコいいクルマを運転したことはなかった。カーキチの若者なら、このとききり性能のいい外車を、いちどは自分で乗りまわしてみたいものである。多木にも、その誘惑はあ

った。

むろん、岡本も、多木の胸中は十分に知っているはずである。だが、彼は黙殺していた。「替ってやろうか」などとは、おくびにもだしはしなかった。

こいつはホンモノのドライバーだと、多木は感心した。自分のクルマは、自分が運転する。他人にハンドルはまかせない。これが、ドライバーの守るべき基本的ルールだと、多木は考えていた。

彼は宇津康子とドライブするときは、たがいのクルマを、そのときどきのコースによって、どちらかが運転する。だが、どちらのクルマも、おなじMVハードトップであり、二人は、いわば一心同体であった。二人とも、他人のクルマに乗っているような気がしなかった。

もちろん、彼も、康子以外の他人のクルマを運転したことはなかったが、ドライパー仲間では、気やすくクルマを借りたり貸したりする風習があった。

「ちょっとクルマを貸してくれないか」

などと、クルマを持たないペーパードライバーに無心されると、

「ああ、いいよ」

と、おうようにキイをわたしてやる。

だが、このなに気ないクルマの貸し借りに、危険な陥穽がかくされていた。他人のクルマで事故をおこす事件があつたをたない。しょっちゅう新聞の社会面をにぎわしていた。

借りたクルマで事故をおこせば、借りた当人はむろん、貸したクルマの持主まで、責任を追求される。事故がおきてから悔んでも後の祭であった。

貸した本人は、好意のつもりで貸してやったとしても、結果的には、仇になってかえってくるその好意は、じつはホンモノの好意とはいいがたかった。彼の好意は、軽卒と無責任の別名にほかならなかった。

たとい借りた相手が、無事にクルマをかえしてきたとしても、しかし、それは彼が偶然事故をおこさなかった

というだけにすぎない。双方の軽卒と無責任が、それで帳消しになるわけではなかった。

ほんとうにクルマを愛しているドライバーにとつては、クルマは、彼の恋人か愛妻にひとしいといえる。

「ちょっと奥さんを貸してくれないか」

と、無心されて、

「ああ、いいよ」

と、おうように承知する男がいるか。

自分のクルマに、恋人か愛妻ほどの愛情を抱いていないものは、マイカー族の資格はないと、多木は、いつもそう思っていた。

長距離ドライブは、交代で運転すれば、疲労も少なく、事故も防げると、専門家はいう。だが、多木は、こういう専門家の言葉にも、反発をおぼえていた。

これでは、ドライパーが自分と組になったドライパーと交代で、自分の妻を犯すようなものではないか。どれほどの長距離ドライブでも、さいごまで自分ひとりで自分のクルマを運転すべきである。途中で疲れば、クルマをとめて憩えばいい。途中で眠くなれば、クルマをとめて仮眠すればいい。これが、長距離ドライブの最低のルールであった。

いや。長距離ドライブだからといって、疲れたり眠くなったりするようなドライパーは、さいしょから、長距離のドライブなどとしやれるべきではないのである。

現に、岡本和彦は、東京、青森間七百三〇キロを独走して、なお余力を残していたという。こういうドライパーだけが長距離ドライブをたのしむ資格があるのだといえただろう。

多木自身も、クルマの貸し借りは大嫌いであった。それは、好き嫌いという心情の問題であるとともに、モラルの問題でもあった。

彼の大学の仲間にも、ペーパードライバーは大勢いた。なかには、ガールフレンドとのデイトに、彼のMVを借りにくるものもいたが、いつも彼は、



「駄目だ」と、言下にはねつけた。

「どうしてもドライブしたければ、レンタカーがあるじゃないか。あれでいけよ」と、彼はいつてやった。

とりつく島がない。仲間たちは、

「ケチなやつだ」

と、陰口を叩く。だが、彼は意に介さなかった。彼のこの「ケチ」精神には、ドライバーのルールを厳守しようというきびしさが裏うちされていた。

大津SAをでるころから、ハイウェイにたそがれが舞いおちだしていたが、京都、高槻、茨木と、さいごのコースをいっ気にとばし、西宮ICについたときには、すっかり夜の時刻にはいつていた。

「神戸まで阪神高速ができたので、便利になったよ」

岡本は、その新しくできたハイウェイにクルマを乗りいれながらいった。万国博の開催にあわせて、このハイウェイは完成したらしい。行手の右側には、六甲の山な

みが、中腹のあたりまで点々と灯をともしたまま西にのび、左手には、くろぐろとした大阪湾が見えかくれしている。山と海とにはさまれたその夜の闇のなかを、ハイウェイは一路神戸に走っていた。

多木には、はじめて接する神戸のたたずまいであった。彼は、車窓から睡をこらして、山の手から海にむかつて、なだれるようにひろがっている街々の灯をながめた。

「似ている——」と、彼は思わずつぶやいていた。

彼とよく愛車を駆って、横浜に遊びにでかけていた。彼は、この港町が好きだった。わけても、外人墓地のある山の手から、「港の見える丘公園」、その近くにある元町あたりが、たいそうお気に召していた。その横浜と、いまはじめて目のあたりにする神戸の印象が、どこか似ているように思えるのである。

やはり、同じ港町のせいだろうか。横浜には、東京な

どちがって、静かで、おちついた、それでいて、いかにも港町らしい、エキゾチックでしゃれたムードがあった。その同じムードを、彼は、神戸の第一印象から感じたのである。

多木は、宇津康子の面影を臉に描いてみた。この町は、たしかに、あの女が住むにふさわしい町だったように思える。いや。あの女は、いま、夜の明りがまたたいているこの町のどこかにいるので



＜神戸の催し物 3月ご案内＞

＜音楽＞

★いしだあゆみショー

3月4日(木)

P.M.6:30開演

神戸国際会館  
民音 会員券 750円

★ダークダックスリサイタル

3月8日(月)

P.M.6:30開演

神戸国際会館  
労音 会費 900円

★秋吉敏子カルテット

3月9日(火) P.M.7:00開演 神戸国際会館

入場料 S1,800円 A1,500円 B1,200円 C900円

ピアノ・秋吉敏子、テナー・サック・スルー・ダバキン、  
ベース・マイク・モア、ドラム・スー・ジム・マディソン

★森田健作ショー

3月15日(月) P.M.2:00及び6:30開演 神戸国際会館

民音 会員券 550円

★ベラ・ルデンコリサイタル

3月22日(月) P.M.6:30開演 神戸国際会館

労音 会費 1,300円

★第10回国際ジョイントリサイタル

3月27日(土) P.M.2:00開演 神戸国際会館

入場料 250円



ベラ・ルデンコ

＜演劇＞

★文学座公演「美しきものの伝説」

3月18日・19日・20日 毎夕6時15分開演 神戸国際会館

労演 会費 650円

作/宮本研、演出/木村光一

出演/加藤武、川辺久遠、菅野忠彦、江守 徹、太地喜和子、藤田弓子、吉野敏子他。

＜70神戸市民劇場＞

★大蔵流狂言の会

3月3日(水) P.M.6:30開演 神戸国際会館

入場料 A800円 B500円

初 演(うつばざる) 善竹幸四郎、善竹玄三郎他

素袍落(すおとし) 大蔵弥太郎他

首 引(くびひき) 善竹圭五郎、善竹忠一郎他

＜舞踊＞

★グラ・アントニオ「フラメンコ」舞踊団

3月29日(月) P.M.6:30開演 神戸国際会館

民音 会員券 A1,800円 B1,300円

＜美術＞

★春の美術展

2月9日～4月4日 県立近代美術館

開館 A.M.9:30～P.M.5:00(但し入場は4時半まで)

入場料 大人80円、大・高校生60円、小・中学生40円

ある。多木の胸は、ふいに、さざなみがうつようにときめいてきた。

ハイウェイが市内にはいり、やがて、暗い空にひとときわ抜きんでた高層ビルのちかくのランブをでると、フォード・ムスタングは、静かなビル街の一角にあるホテルの駐車場にすべりこんでいた。

ここは、多木もその名を知っているOホテルだった。岡本を先頭にして、三人がロビーにはいると、長身の青年がソファから立って一行を出迎えた。

「お帰りなさい。予定どおりのお着きでしたね」

青年は岡本に挨拶した。岡本はかるくうなづいてみせた。そういえば、さつき、大津SAで、岡本はどこかに電話をかけていた。神戸のこの青年に連絡して、出迎えさせるためだったのだろう。

「紹介しよう」岡本はいった。

「こっち、うちの社の横井邦夫君。こっち、学校仲間の多木洋介君だ。多木は神戸ははじめてだから、よろしくたのむよ」「そうでしたか。よくいらつしやいました」

横井邦夫は、いんぎんに多木に挨拶した。年は二十五、六歳だろうが、スーツの着こなしがうまい。物腰が

やわらかく、なかなか社交的な感じの青年である。こういうタイプが神戸の青年だというのだろうか。

「さて。ひと休みしたら、どこかへめしを食いにでかけよう。多木はなにが食いたい?」

岡本がちょっと意気こむような口調でたずねた。

「肉料理がいいな。コーベビーフ」

多木も遠慮せずにいっていった。

「よし。じゃ、Kヘビフテキを食いにいこう」

岡本も即座にいっていった。

多木の部屋は、岡本たちの部屋とならんで、三階にあってあった。多木が与えられた部屋にはいつてしばらくすると、ドアがノックされて、横井がはいってきた。

「おいそぎで、お持ちあわせがないご様子ですが、これをお使い下さい」横井は一万円札を十枚おろしたんで、テーブルにおいた。

「東京にお帰りになってから、精算していただければ結構です」多木に余計な気を使わせまいとする、岡本の配慮なのであろう。デリカシイのあるやり方だと、多木は、あらためて岡本和彦という青年に興味と魅力のようなものをおぼえていた。

(つづく)



